

## 鄭孟津氏による南宋姜夔 『白石道人歌曲』十七首復元旋律

(旋律復元) 鄭 孟 津

(五線譜訳, 解説) 明 木 茂 夫

### はじめに

南宋の文人姜夔<sup>きやうき</sup> (1155~1221), 鄱陽の人, 字は堯章<sup>あざな</sup>, 号は白石道人。音楽に通じ, 詞人として名を残した。彼の詞集『白石道人歌曲』の内, 詞 17 首と琴曲「古怨」1 首, 及び「越九歌」10 首には, 楽譜が残されている。12 世紀の楽譜が残っているとすれば中国のみならず, 世界の音楽史上まことに貴重な資料だと言ってよいだろう。

白石歌曲の楽譜はかなり早い段階からその読み方が分からなくなっていた。清代の学者による研究では完全な旋律の復元には至っていなかった。ところが 1950 年代に入ってから本格的な研究が進み, 楊蔭瀏, 丘瓊蓀, 顧一樵といった音楽学者により, その旋律が復元されるに至った。しかし細かな音符の解釈にはまだ定説が無く, 音符自体も読みが分からないまま書写を繰り返したため校勘が容易ではなく, 各学者による復元譜も細部に相違があるのは致し方ないところである。現在に至るも新たな音符の解釈に基づく復元の試みが続けられている。

鄭孟津氏, 号は西村。浙江省温州在住の音楽理論や昆曲音楽研究の大家で, 今年 93 歳になられる。『詞源解箋』(浙江古籍出版社 1990), 『昆曲音

楽与填詞（甲乙）』（台北学海出版社 2000）などは、いずれも詳細を極めた中国音楽理論・詞曲音楽研究の大著である。特に最新刊『宋詞音楽研究』は 2004 年に発表された、氏の詞楽研究の集大成である。ここに示された白石道人歌曲の最新の復元譜は、詞調・詞律・音律に精通した長年の研究成果の結実であり、中国音楽研究史上大きな価値を有すると言えよう。

鄭氏の復元旋律の特徴は、他の研究者に比べて旋律全体を朗詠調に、長嘯風に訳しておられることであろう。それは単に一つずつの音符を長めに設定しているということではない。鄭氏は戯曲のような通俗的なものとは際だたせて、宋詞の音楽を非常に古雅なるものと捉えておられるようである。また歌詞一字一字に音を与えようと言うよりも、まず旋律線として把握してそこに歌詞を配置するような方法をとっておられるようにも見える。

氏の手になる白石歌曲の復元譜は、残念ながらまだ日本では広く紹介されていない。また原書では楽譜に全て簡譜（数字譜）が用いられており、そのままでは日本の読者にはまことに不便である。そこで著者のお許しを得て、鄭氏による復元譜を五線譜に訳し、ここに掲載することとした。この場を借りて鄭氏に感謝申し上げる。また五線譜化の過程で著者と連絡をとりつつ、原著の簡譜に残っていた細かな遺漏や誤植を五線譜においては訂正することができた。原著を参照なさる際には、この点をご考慮下さるようお願いしたい。

## 凡 例

- ・本五線譜は、鄭孟津著『宋詞音楽研究』（中国文史出版社、2004 年 8 月）に収められた『白石道人歌曲』17 首の復元旋律の五線譜訳である。
- ・掲載順序は鄭氏の原著の順ではなく、別集の掲載順に従った。
- ・詞の文字及び詞の創作年代については、基本的に夏承燾『姜白石詞編年箋校』（上海古籍出版社 1981）に従った。
- ・詞楽において、「引」は前奏に当たる。また「過片」は間奏に相当し、前段と後段をつなぐ。鄭氏は「過片」の形式によっては「換頭」などの語も用いておられ、また多くの場合「過片」に「引」とに同じ旋律を用

いるよう指示しておられるが、ここでは煩を避けて「引」と「過片」を表示するのみとした。なお、「引」や「過片」の旋律は鄭氏の創作であり、白石歌曲の原典にはない。

- 原譜ではそれぞれの冒頭に宮調が示されているが、ここでは先にとりまとめて表示し、各曲の冒頭には一々示さなかった。各曲に指定されている調性は次のとおりである。

- 1、鬲溪梅令 仙呂調（夷則<sup>♭</sup>B爲宮，仲呂G爲羽） 簫管六字調（1=<sup>♭</sup>B）
- 2、杏花天影 中呂調（夾鍾F爲宮，黃鍾D爲羽） 簫管尺字調（1=F）
- 3、醉吟商小品 雙調（夾鍾F爲宮，仲呂G爲商） 簫管尺字調（1=F）
- 4、玉梅令 高平調（林鍾A爲宮，姑洗<sup>♭</sup>G爲羽） 簫管凡字調（1=A）
- 5、霓裳中序第一 商調（夷則<sup>♭</sup>B爲宮，無射C爲商） 簫管六字調（1=<sup>♭</sup>B）
- 6、揚州慢 中呂宮（夾鍾F爲宮） 簫管尺字調（1=F）
- 7、長亭怨慢 中呂宮（夾鍾F爲宮） 簫管尺字調（1=F）
- 8、淡黃柳 正平調（中呂G爲宮，太簇E爲羽） 簫管小工調（1=G）
- 9、石湖仙 越調（無射C爲宮，黃鍾D爲商） 簫管正宮調子（1=C）
- 10、暗香 仙呂宮（夷則<sup>♭</sup>B爲宮） 簫管六字調（1=<sup>♭</sup>B）
- 11、疏影 仙呂宮（夷則<sup>♭</sup>B爲宮） 簫管六字調（1=<sup>♭</sup>B）
- 12、惜紅衣 無射宮（無射C爲宮） 簫管正宮調（1=C）
- 13、角招 黃鍾清角調（黃鍾D爲宮，姑洗<sup>♭</sup>G爲角） 簫管乙字調（1=D）
- 14、徵招 黃鍾下徵調（黃鍾D爲宮，林鍾A爲徵） 簫管乙字調（1=D）
- 15、秋宵吟 越調（無射C爲宮，黃鍾D爲商） 簫管正宮調子（1=C）
- 16、淒涼犯 仙呂調犯雙調（夷則<sup>♭</sup>B爲宮，仲呂G爲羽 犯 夾鍾F爲宮，仲呂G爲商） 筒音爲A管 上字調犯六字調（1=<sup>♭</sup>B 轉 1=F）
- 17、翠樓吟 雙調（夾鍾F爲宮，仲呂G爲商） 簫管尺字調（1=F）

## 1、鬲溪梅令

姜白石  
鄭孟津譯譜  
慶元二年 (1196)

仙呂調 (1 = ♭B)



(引)



好 花 不 與 殢 香 人 浪 粼 粼 又 恐 春 風



歸 去 綠 成 陰 玉 鈿 何 處 尋 木 蘭 雙 槳 夢 中 雲

※ 1

(過片)

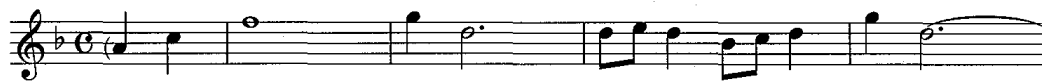


小 橫 陳 漫 向 孤 山 山 下 覓 盈 盈 翠 禽 啼 一 春

## 2、杏花天影

淳熙十四年（1187）

中呂調（1 = F）



（引）



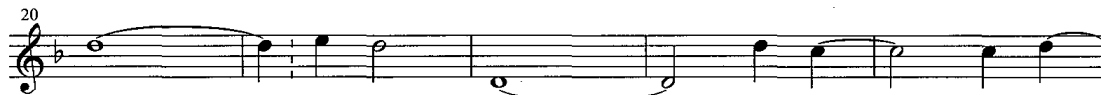
綠絲低拂鴛鴦浦想桃



葉當時喚渡又將愁眼



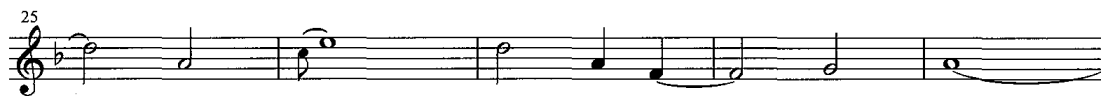
與春風待去倚欄檣更少



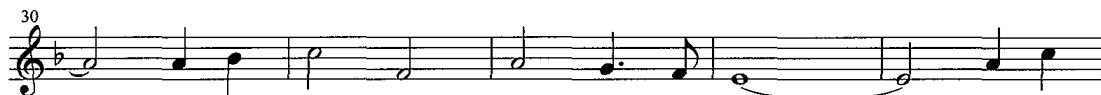
駐金陵路鶯吟燕舞

（過片）

※1



算潮水知人最苦



滿汀芳草不成歸日

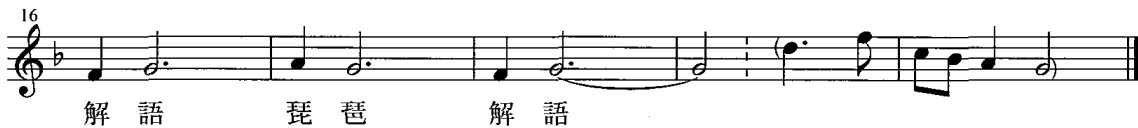


暮更移舟向甚處

## 3、醉吟商小品

紹熙二年 (1191)

雙調 ( 1 = F )



## 4、玉梅令

紹熙二年（1191）

高平調（1 = A）

(引)

疏 疏 雪 片 散 入

溪 南 苑 春 寒 鎖 舊 家 亭 館 有

玉 梅 幾 樹 背 立 怨 東 風 高 花 未 吐

暗 香 已 遠 公 來 領 略 梅

(過片)

花 能 勸 花 長 好 願 公 更

健 便 揉 春 爲 酒 翦 雪 作 新 詩 拚 一

日 繞 花 千 轉

## 5、霓裳中序第一

淳熙十三年 (1186)

商調 (1 =  $\flat$  B)

亭 阜 正 望 極 亂 落

江 蓮 歸 未 得

多 病 卻 無 氣

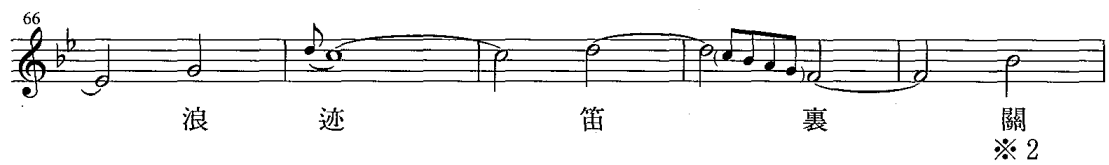
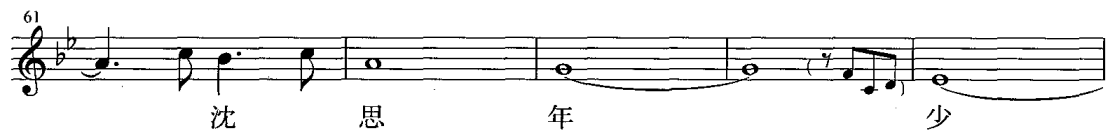
力 況 紈 扇 漸 疏  
※ 1

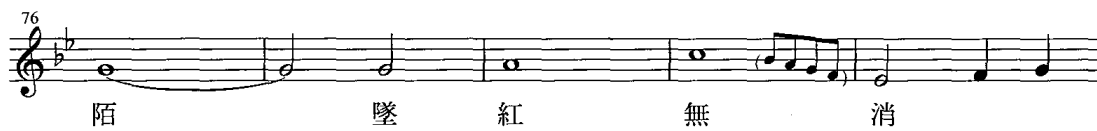
羅 衣 初 索 流

光 過 隙 歎 杏

梁 雙 燕 如



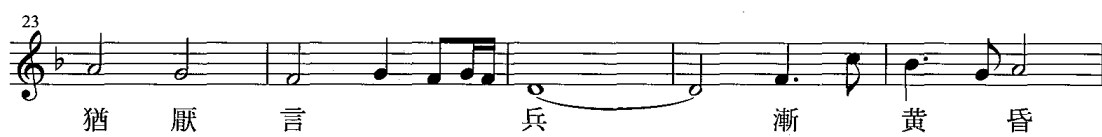
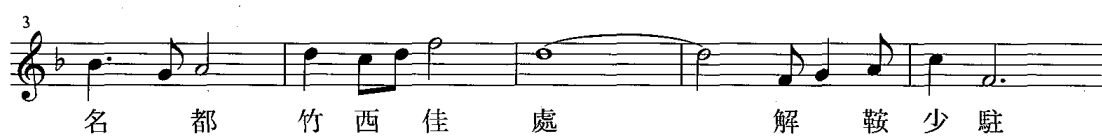


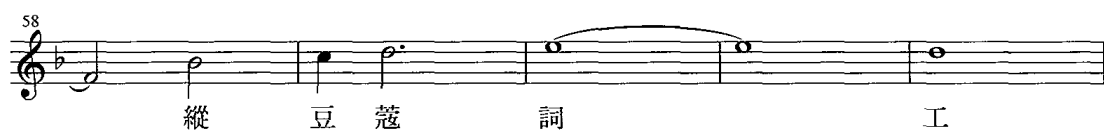
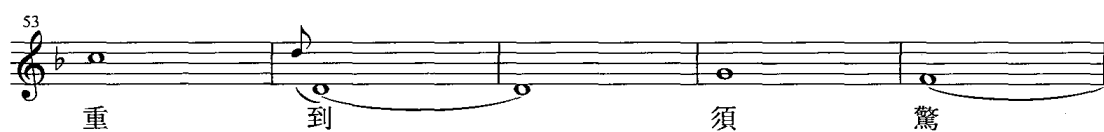


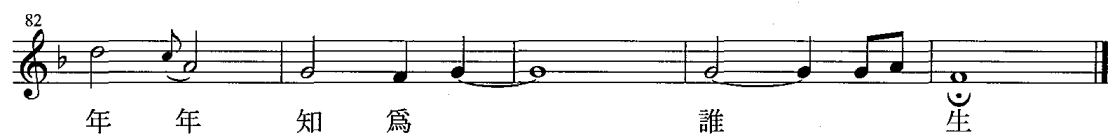
## 6、揚州慢

淳熙三年（1176）

中呂宮（1=F）







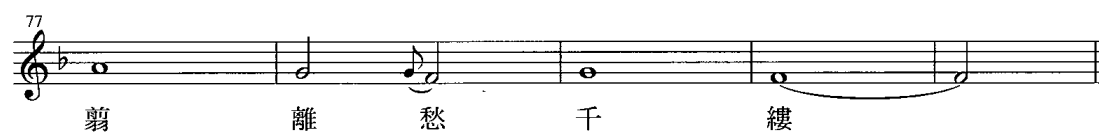
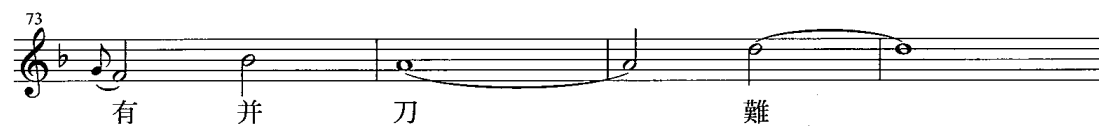
## 7、長亭怨慢

紹熙二年 (1191)

中呂宮 ( 1 = F )









## 8、淡黄柳

紹熙二年 (1191)

正平調 (1 = G)



(51)



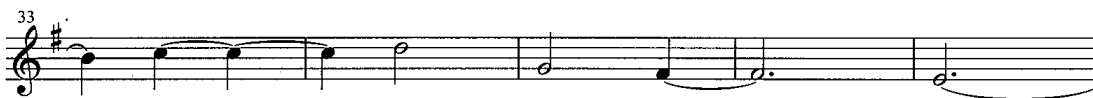
榮



空城

曉

角



吹

人

垂

楊

陌

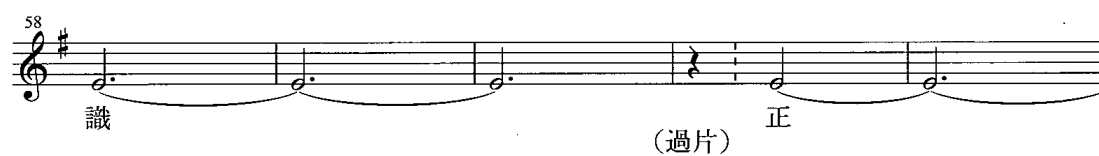


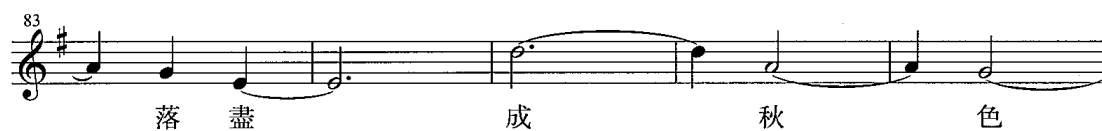
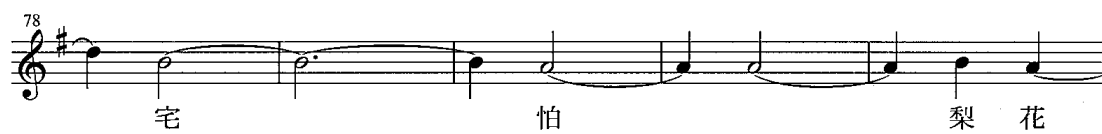
馬

上

單

衣





## 9、石湖仙

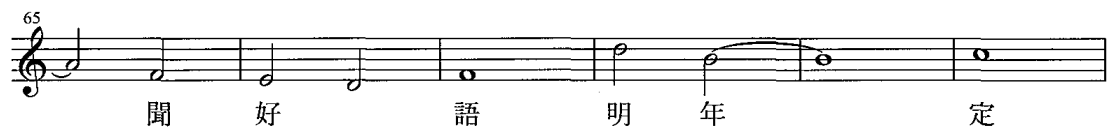
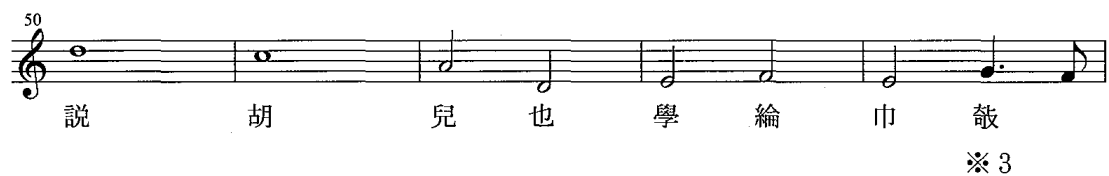
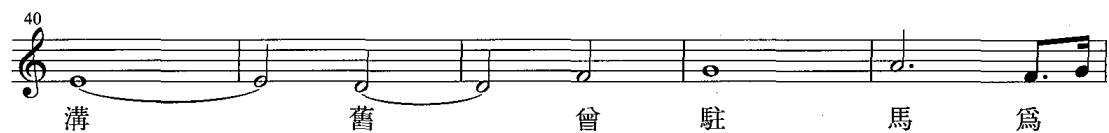
淳熙十四年 (1187)

越調 (1 = C)



(引)





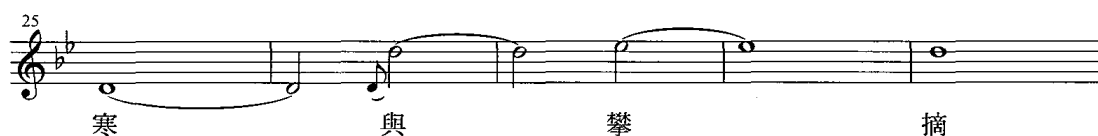
## 10、暗香

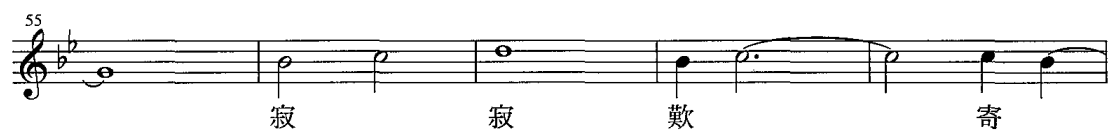
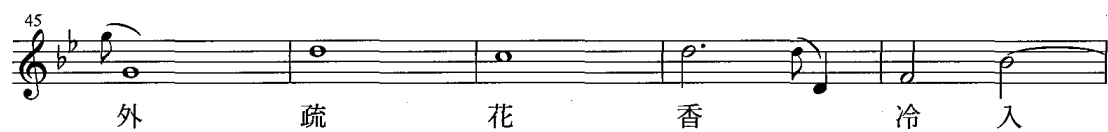
紹熙二年 (1191)

仙呂宮 (1 = ♭B)



(引)





70  
泣 紅 萼 無 言

75  
耿 相 憶 長

80  
記 曾 攜 手 處

85  
千 樹 壓 西

90  
湖 寒 碧 又 片 片 吹 盡

96  
也 幾 時 見 得

Detailed description: The image shows a musical score for a song, consisting of six staves of music. Each staff begins with a measure number (70, 75, 80, 85, 90, 96) and a key signature of two flats (B-flat and E-flat). The lyrics are written in Chinese characters below the notes. The melody is written in a treble clef. The lyrics are: 泣 紅 萼 無 言 (70-74), 耿 相 憶 長 (75-79), 記 曾 攜 手 處 (80-84), 千 樹 壓 西 (85-89), 湖 寒 碧 又 片 片 吹 盡 (90-95), and 也 幾 時 見 得 (96-100). The score ends with a double bar line at measure 100.



## 11、疏影

紹熙二年（1191）

仙呂宮（1 =  $\flat$  B）

苔 枝 綴 玉

5 有 翠 禽 小 小 枝

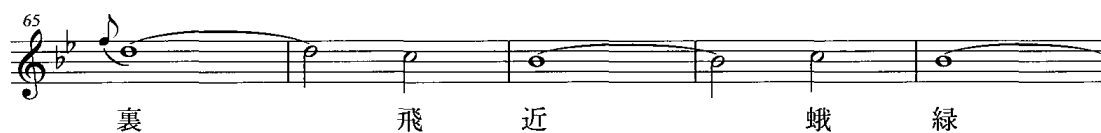
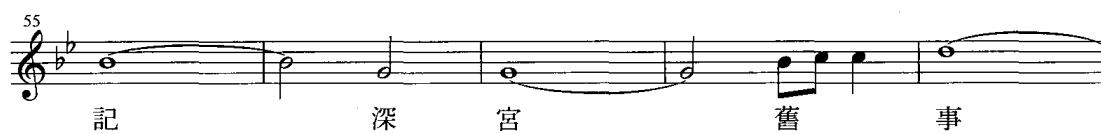
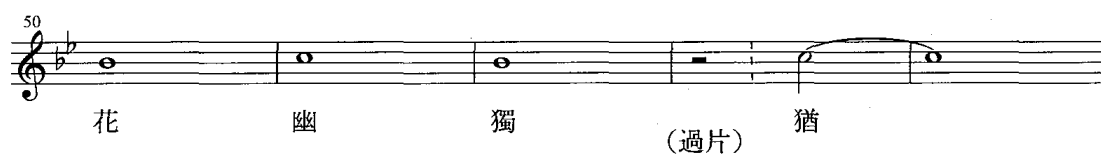
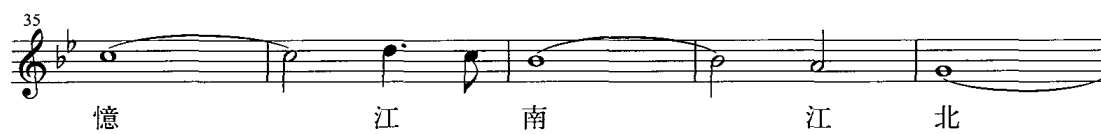
10 上 同 宿 客 裏

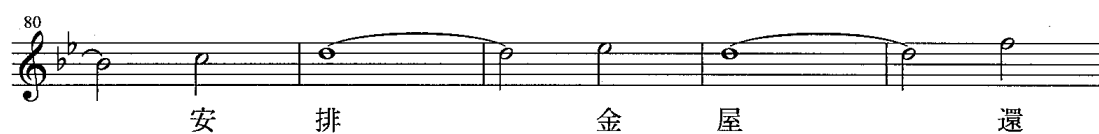
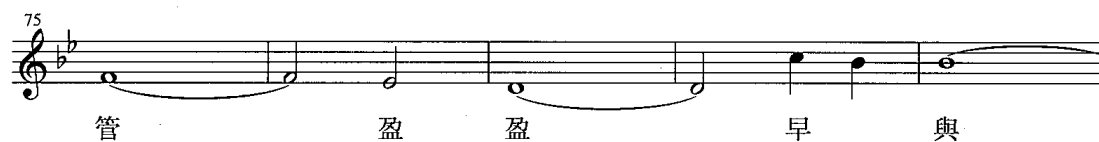
15 相 逢 籬 角 黃

20 昏 無 言 自 倚

25 修 竹 昭 君 不 慣

30 胡 沙 遠 但 暗

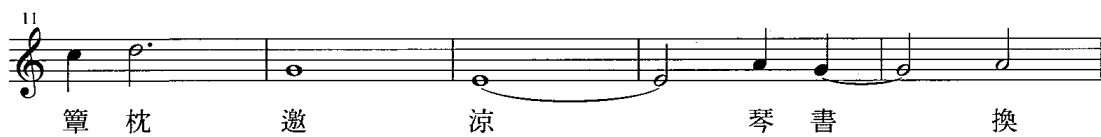




## 12、惜紅衣

淳熙十四年 (1187)

無射宮 (1 = C)



36  
蟬 說 西 風 消

41  
息 (過片) 紅 梁 水 陌

46  
魚 浪 吹 香 紅 衣

51  
半 狼 藉 維 舟 試 望

56  
故 國 眇 天 北 可 惜

61  
渚 邊 沙 外 不 共 美 人 遊

66  
歷 問 甚 時 同 賦

71  
三 十 六 ※2 秋 色

### 13、角招

紹熙五年 (1194)

黃鍾清角調 (1 = D)



(51)



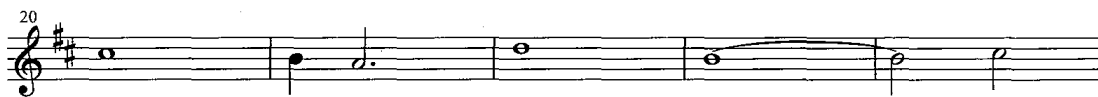
爲春瘦 何堪



更繞西湖盡是垂柳



自 看 煙 外 岫 記 得 與



君 湖 上 攜 手 君



歸 未 久 早 亂 落 香 紅 千

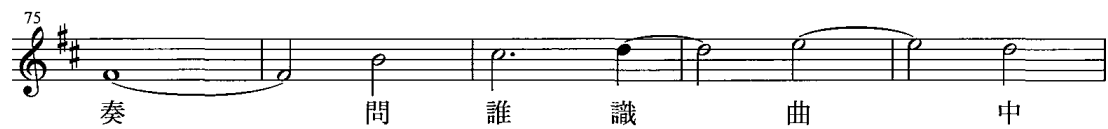
※ 1



敵　　一　　葉　　凌　　波　　縹　　緲

✖ 2



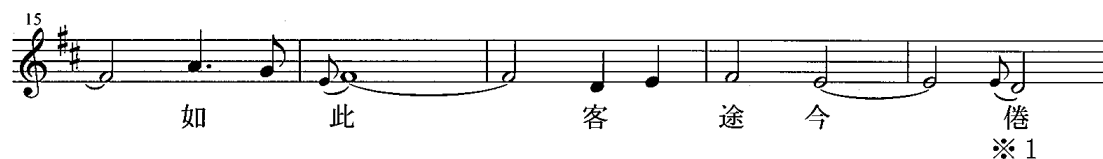




## 14、徵招

嘉泰元年（1201）

黄鍾下徵調（1 = D）



35  
還 是 (過片) 迤 邐 刻

40  
中 山 重 相 見 依 依

45  
故 人 情 味 似 怨 不

50  
來 遊 擁 愁 鬢 十

55  
二 一 丘 聊 復  
※ 2

59  
爾 也 孤 負 幼 興

63  
高 志 水 蒨

67  
晚 漠 漠 搖 煙

72  
奈 未 成 歸 計

## 15、秋宵吟

紹熙二年（1191）

越調（1 = C）

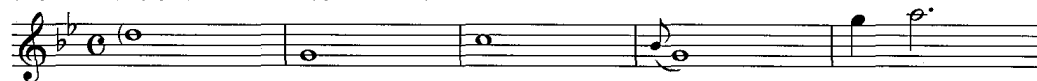




## 16、淒涼犯

紹熙二年（1191）

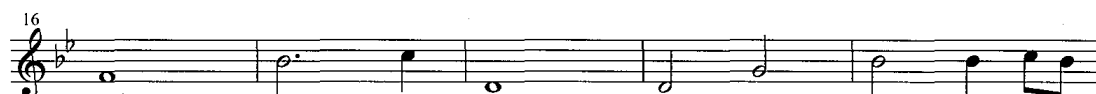
仙呂調犯雙調（1 =  $\flat$  B 轉 1 = F）



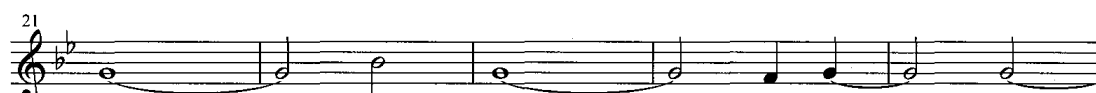
（引 G=6）



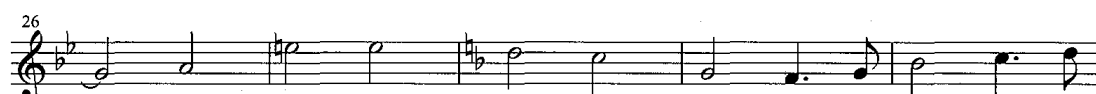
緑 楊 巷 陌



秋 風 起 邊 城 一



片 離 索 馬 嘶



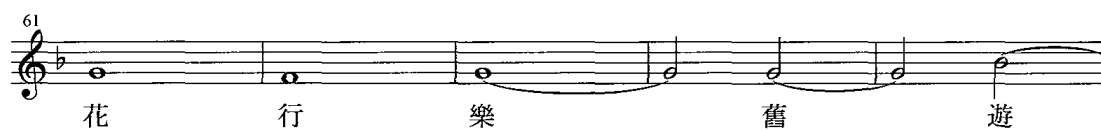
漸 遠 人 歸 甚 處 戍

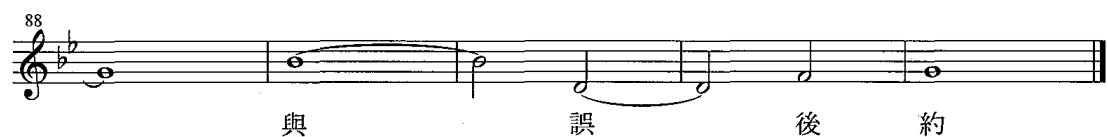
（仙呂より雙調へ）

※ 1



樓 吹 角 情 懷 正 惡

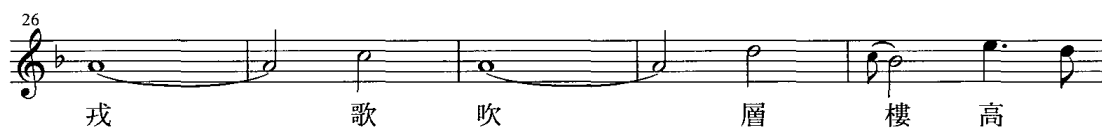
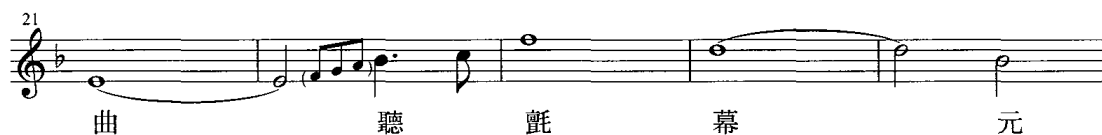
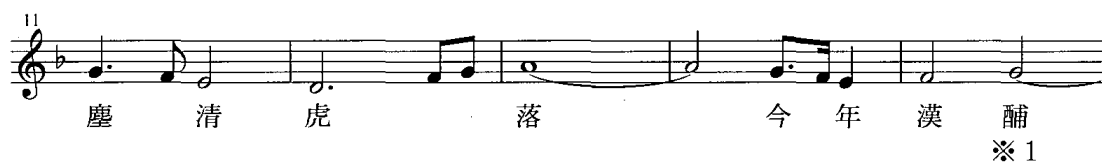




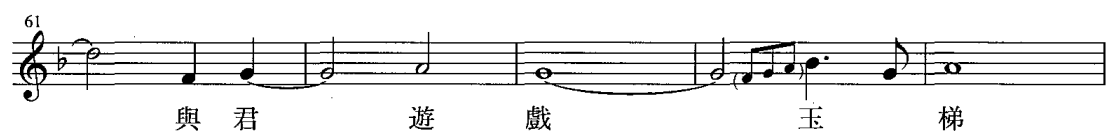
## 17、翠樓吟

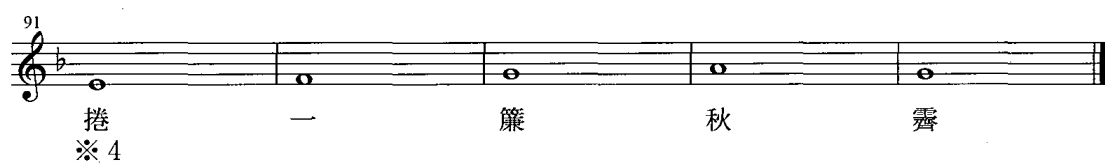
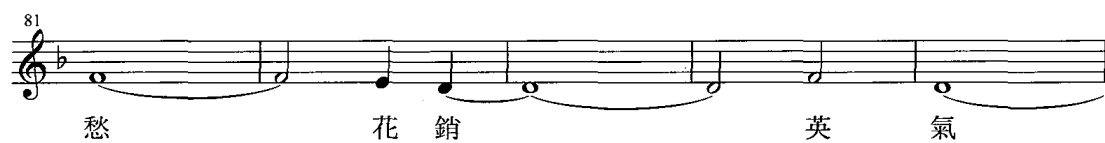
淳熙十三年 (1186)

雙調 (1=F)









注 釈

1、鬲溪梅令

※1 鄭氏は「陰」を「蔭」に作る。

2、杏花天影

※1 鄭氏は「儻」を「舞」に作る。張本，陸本も「舞」。

3、醉吟商小品

※1 原書では「又」の後に「正是春歸」を欠くも，鄭氏のご指示で補った。

4、玉梅令

鄭氏は紹熙癸卯（1183）頃とするが，ここでは紹熙二年（1191）説に従う。

5、霓裳中序第一

鄭氏は1188年頃とするが，ここでは淳熙十三年（1186）説に従う。

※1 鄭氏は「況」を「恐」に作る。

※2 鄭氏は「關」を「江」に作る。

※3 鄭氏は「漂」を「飄」に作る。

※4 鄭氏は「墟」を「爐」に作る。

6、揚州慢

※1 鄭氏は「藥」を「芍」に作る。

7、長亭怨慢

鄭氏は紹熙辛亥（1176）頃の作とするが，ここでは紹熙二年（1191）説に従う。

※1 「緑深」は，鄭氏自注に「原作は“深緑”」とあるが，各本共に「緑深」に作る。

8、淡黄柳

鄭氏は詞牌名を「淡黄柳近」とする。

鄭氏は紹熙庚戌（1190）頃の作とするが，ここでは紹熙二年（1191）説に従う。

※1 鄭氏は「唯」を「惟」に作る。

9、石湖仙

※1 鄭氏は「引」を「歸」に作る。

※2 鄭氏は「盧」を「蘆」に作る。

※3 鄭氏は「敲」を「欹」に作る。

10、暗香

鄭氏は詞牌名を「暗香慢」とする。

※1 原書では「都忘却…」の前に「何遜而今漸老」を欠くも，鄭氏のご指示で

補った。

※2 原書では「江」の後「寄與路遙」の前に「國，正寂寂。歎」を欠くも，鄭氏のご指示で補った。

※3 鄭氏は「尊」を「樽」に作る。

#### 12、惜紅衣

※1 鄭氏は「牆」を「墻」に作る。

※2 鄭氏は「陂」を「坡」に作る。

#### 13、角招

※1 鄭氏は「香」を「春」に作る。

※2 鄭氏は「縹緲」を「飄渺」に作る。

#### 14、徵招

※1 鄭氏は「倦」を「已」に作る。

※2 鄭氏は「丘」を「邱」に作る。

#### 15、秋宵吟

※1 鄭氏は「暗」を「情」に作る。

#### 16、淒涼犯

※1 鄭氏は「戌」を「戍」に作る。

※2 鄭氏は「度」を「渡」に作る。

#### 17、翠樓吟

※1 鄭氏は「酹」を「脯」に作る。

※2 鄭氏は「簷」を「檐」に作る。

※3 鄭氏は「萋」を「淒」に作る。

※4 鄭氏は「晚」を「暁」に作る。

※5 鄭氏は「捲」を「卷」に作る。

(受理日 平成19年1月17日)